

経済危機の構図 (15)

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授 川中清司

明治維新の群像 ①

■外圧と幕府の弱体化

「泰平の眠りを覚ます上喜撰(蒸気船) たった四はいで夜も寝られず」。

一八五三(嘉永六)年、ペリー艦隊が浦賀沖に来航して騒然となる。そのわずか一五年後の一八六七(慶応三)年には、幕府が大政奉還をして新政府となる革命的な変化が起きた。尊皇と佐幕、攘夷と開国、公武合体と倒幕、いろいろな思想が入り乱れた。外国からの開国圧力が強まり、幕府は体制が弱まり、時代の変化に適応した自己改革ができなかった。

薩長同盟によって倒幕勢力が強まり、一方では増税や物価高騰で民衆の不満が高まっていた。それが複合して大きなうねりとなり、一挙に明治維新という爆発が起こったのだ。

■若い力・量から質への発展

明治維新という大変革をなしたげたのは、若い力である。若さは強い。純粹で燃える。過去にこだわらず、現実の矛盾と戦おうとする。維新の登場人物は、いづれも三〇歳前後で、大政奉還のときでも勝海舟は四四歳、土佐の山内容

堂は四〇歳だった。

幕藩時代は、上級武士が支配する身分社会だった。上士と下士、町人や百姓など、身分による絶対的の差別があり、その体制に順応し従うことが道徳とされて秩序が保たれた。それなりに社会が維持されて文化も育っていた。だが、外国から開国圧力を受ける時代が来て、支配者は対応力と統治力を失っていった。

世の中を変えようとする勢力が盛り上がり、その活動量が飛躍的に増加し、爆発して社会の質を変えた。封建社会から資本主義社会へと。まさに「量から質」への発展である。

■維新の三つのうねり

明治維新には三つのうねりがある。一つは、黒船来航―安政条約―安政大獄。次に、文久の改革―禁門の変・長州征伐。三つ目は、薩長同盟―大政奉還、そして戊辰戦争と続く。中でも文久元(一八六一)年に公武合体のため皇女・和宮が將軍家茂に降嫁してから、慶応三(一八六七)年の大政奉還までの七年間は、一挙に時代の歯車が回り、歴史の扉が開かれた。

■御三家の水戸藩が尊王攘夷

幕府はペリー艦隊に対し、「わ

明治維新の人物年輪

黒船来航から大政奉還まで	坂本龍馬	松平春嶽 西郷隆盛	山内容堂	勝海舟
1853・嘉永6・黒船来航	17歳	25歳	26歳	30歳
1854・安政元・日米和親条約	18歳	26歳	27歳	31歳
1859・安政6・安政の大獄	23歳	31歳	32歳	36歳
1861・文久元・皇女和宮の降嫁	25歳	33歳	34歳	38歳
1862・文久2・文久の改革	26歳	34歳	35歳	39歳
1863・文久3・薩英戦争	27歳	35歳	36歳	40歳
1864・元治元・禁門の変・長州征伐	28歳	36歳	37歳	41歳
1866・慶応2・薩長同盟 結成	30歳	38歳	39歳	43歳
1867・慶応3・大政奉還	暗殺 31歳	39歳	40歳	44歳

が国は鎖国でござる」と繰り返して、彼等の要求を引き延ばすだけで対応策はなく、混乱は増すばかりだった。長い鎖国の泰平に慣れ、無防備で財政も乏しかった。寺の

釣り鐘まで海岸に伏せて大砲に見せかけるといふ狼狽ぶりに、国民の信頼を一挙に失った。

諸国の大名や武士たちに攘夷思想が起こり、尊王攘夷へと進んだ。御三家の水戸藩が強硬な尊皇攘夷派だった。「尊王」は朝廷を尊び天皇中心の政治に戻すこと。「攘夷」とは夷敵（外国）を日本から打ち攘うことだ。

■日本侵略の危機感と攘夷

当時、中国（清朝）はアヘン戦争（一八四〇〜一八四二年）でイギリスに敗れ、香港島を奪われた。イギリスは産業革命で大量生産が可能となった繊維製品を植民地のインドへ売り、インドでアヘンを積み込んで中国で売りさばき、茶葉を手に入れて本国へ運んだ。このアヘン密貿易でイギリスは膨大な利益を上げていた。

中国はアヘン中毒蔓延の危険にさらされ、密貿易を止めさせようとアヘンを没収した。イギリス商人がこれに反発して戦争となった。攘夷論はこうした侵略から日本を守る防衛思想だった。

■勅許得られず条約調印

外圧に押された幕府は、やむなくアメリカと条約を結ぶことを決め、天皇に勅許を受けるべく、老

中堀田正睦を上洛させた。勅許があれば尊攘派の攻撃をかわせるとみたからだ。しかし朝廷の内部では、諸藩が公卿にとり入った派閥勢力があり、幕府と協力して事を運ぶ公武一和の穏健派と、天皇の権威を取り戻そうとする過激派があった。

過激派は薩摩、長州、土佐の雄藩と下級の公卿が結び、勤王の志士たちが後押ししていた。脱藩して自由に諸国を回り、活動する志士たちの力は無視できない力となっていた。

孝明天皇の異国嫌いもあり、結局、幕府は条約の勅許は得られず、面目は失墜した。代わって大老となった井伊直弼は、勅許を得ずして一八五八（安政五）年、日米修好通商条約の調印に踏み切った。

■開国の経済混乱と民衆不満

条約締結と開港は、国内経済の混乱をもたらした。生糸や茶などの輸出が増え、綿や毛織物などの輸入が増加し、商人の買いだめなどで物資が不足した。物価が高騰し、庶民の生活は困窮した。

条約は、関税自主権を持たず、治外法権を承認するという不平等条約であった。この条約は、オランダ、ロシア、イギリス、フラン

スとも結ばれ、交易が進むとともに綿作などの国内産業を圧迫した。金銀比価の相違から、大量の金貨が国外に流出した。つまり、金一に対する銀の交換が日本は五で、外国は一五と異なったため、外国から大量の銀を日本に持ち込み金貨と交換されたのだ。幕府は小判を改鑄したが、かえって通貨膨張とインフレを引き起こしてしまっ

■米価の高騰と世直し一揆

文久元（一八六一）年のころから政情不安がつり、諸藩は万一に備えて米を備蓄した。そのため、米の流通が滞り米価が急騰した。「禁門の変」のあとは、長州藩が関門海峡を支配して海上を封鎖した。大阪は長州征伐の幕府軍の拠点となり、兵糧米の買い占めで米価は一〇倍にはね

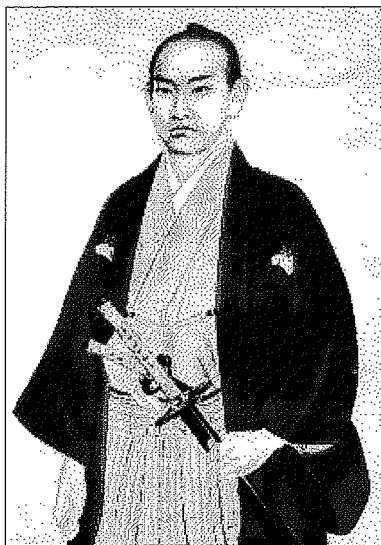
上がり、庶民の生活を苦しめた。「世直し」の風潮が高まっていた。「ええじゃなにか」が流行り人々は熱狂し、踊り歩いた。空から伊勢神宮のお札が降ってきて、狂気

し、乱舞する民衆の波は信州、江戸から近畿、四国まで広がった。諸藩では財政悪化のため重税を強いた。米価の高騰と増税に堪えかねた貧農が、地主、特権商人を襲う、打ち壊しが起きた。関東で始まった「世直し一揆」が全国に広がっていった。

こうした民衆の不満エネルギーの増幅は明治政府になってからも続き、戊辰戦争で頂点に達した。

■安政の大獄と弾圧処罰

話は安政に戻り、水戸の徳川斉昭や越前の松平春嶽は、將軍徳川家定の跡継ぎに一橋徳川家当主の慶喜を押しした。春嶽は橋本左内を京都に派遣し、朝廷工作にあたり、しかし大老の井伊直弼は、紀州徳川家の慶福（後の家茂）を將軍に指名断行した。勅許を得ず



橋本左内の肖像
(福井市立郷土歴史博物館資料)

して日米修好条約に調印した幕府を詰問するため、一八五七（安政四）年六月、徳川齊昭、松平春嶽らは不時登城したが、井伊大老はこれを厳しく処断した。齊昭を永蟄居、春嶽や土佐藩主の山内豊信に隠居、謹慎の処罰を下した。

老中間部詮勝らが朝廷に条約調印の釈明のため上洛した。このとき、安政の大獄が始まった。橋本左内ら志士をはじめ、公家の家臣まで捕縛、投獄され弾圧は苛烈を極め、公家、大名までに及ぶ一〇名を超え。武士は切腹でなく打首にされた。

■吉田松陰・橋本左内の処刑

吉田松陰も捕らえられ「親を思う心にまさる親心 今日のおとづれなんと聞くらん」の句を残して、小塚原・刑場の露と消えた。橋本左内も二六歳の若さで処刑された。辞世の詩は「天祥の大節、嘗て心折す。土室なおも吟ず正気の詩」。「中国の宋の忠臣・文天祥の大義忠節が、かつて私の心に深く刻み込まれた、牢屋にあつても、なおその正気の詩を吟じている」という、国を思い志なかばにして散った志士たちの心情が伝わってくる。左内の斬罪は意外だった。当初は遠島程度と思われていた。老中

の間部詮勝も極刑には反対したが、聞き入れられず幕閣を去った。間部は鯖江藩主で越前藩とは隣藩だった。

■桜田門外の変―井伊大老暗殺

一八六〇（万延元）年三月三日、登城途中の雪の朝、桜田門外で井伊大老が暗殺された。水戸浪士ら一八名に襲撃され首を揚げられた。享年四六歳だった。浪士の斬奸趣意書には、「勅許のない条約や安政の大獄など、天下の大罪人に天誅を加えた」と記されていた。死者は浪士側が五人、大老の彦

根藩側は八人だった。浪士の有村次左衛門は頭と背中を斬られて深手を負ったが、井伊の首を持って遠藤但馬守の屋敷にたどり着き、口上を伝えて自害した。

幕府は大老の殺害を伏せて、後に安藤正信、久世広周を就かせ、三〇日になってようやく死を公にした。巷には井伊掃部守直弼を鴨にもじって「いいかもん 雪の寒さに首を絞め」などと戯れ歌がはやった。

■近江商人の見事な管理機能

近江商人の丁吟は、彦根藩と密接な関係にあった。藩の両替方御用達で苗字帯刀を許され、藩の政治活動も側面から支えていた。三

月三日の井伊大老暗殺の情報が、江戸藩邸から国元に届いたのは七日の夜半であった。だが、丁吟はすでに同日の正午には京都店に速報が届いていた。丁吟は事件発生後、直ちに幹部店員が同藩の桜田屋敷に詰め、藩に調達金一万一〇〇〇両を用立てる一方、丁吟の営業も自粛し、注文品の江戸店卸しを見合わせた。

情報伝達の速さと非常事態にとった危機管理の適確さは、近江商人のほうが幕府側よりはるかに勝っていた。

丁吟の初代・小林吟右衛門は一七七七（安永六）年、近江国愛知郡で生まれた。天秤棒商いから身を起こし、行きも帰りもその地方の特産品を仕入れて、往復で商ち帰って商い繁盛し、六〇歳のころには数万両の資産を築いた。

現在、子孫のチョーギン(株)は本社が東京都日本橋掘留にあり、資本金四億円強、総合アパレルからホテルまで幅広く経営している。

■咸臨丸でアメリカへ―条約批准書交換

「桜田門外の変」の一カ月前、幕府は条約批准書交換の特使をアメリカに派遣した。一八六〇（安

政七）年一月、特使の外国奉行の新見正興ら一行が、米軍艦ポーハタン号に乗って品川を出航した。護衛船として同行した咸臨丸は、提督に軍艦奉行の木村喜毅、艦長に軍艦操練所教授の勝海舟ら総勢九六名が乗り込み、その中には福沢諭吉やジョン万次郎もいた。

三七日間の航海の末、サンフランシスコに到着して市民の大歓迎を受けた。五月にワシントンでブキャナン大統領に謁見し、条約批准書を交換し、条約は正式に発効された。渡米した一行が接した近代文明のインパクトは大きく、その後の日本に大きな影響を与えることとなる。

■公武合体と和宮の降嫁

井伊大老の暗殺のあと、幕府はますます激しくなる尊王攘夷派の圧力をかわすため、將軍家茂の正室に孝明天皇の妹・和宮内親王を迎え、朝廷と融和する「公武合体」を画策した。公武合体に積極的だった侍従の岩倉具視らは、攘夷の推進を条件に降嫁を認めるよう、天皇を説得して認められた。しかし、攘夷派の志士たちはこれに反発し排外主義が高まった。米公使館員ヘンリー・ヒュースケンの襲撃など、各地で外国人襲撃事件が

続発した。当時の京都の政局は、長州藩を中心とする尊王攘夷派が主権を握っていた。

■文久の改革と旧幕体制の揺らぎ

一方、薩摩藩や公武合体派の公卿が中心となって、幕府に対して人事や制度の改革を迫った。一八六二（文久二）年に島津久光は、勅使を先頭に、一〇〇〇名の兵を率いて江戸に乗り込み、將軍の上洛や五大老制など「三事策」の実行を強硬談判し、次の改革を認めさせた。世に言う「文久の改革」である。

・將軍徳川家茂の補佐役に徳川慶喜を後見職として任命

・元越前藩主松平春嶽を政治総裁職に任命

・京都守護職を新設して会津藩主松平容保を任命

・参勤交代を三年に一度に改めた

・洋学研究の推進、西洋式兵制の導入

これを境にして、幕府の体制が大きく揺らいでいった。

■生麦事件でイギリス人殺傷

一八六二（文久二）年八月、帰途についた島津久光は思いがけない「生麦事件」に遭遇する。生麦村（現・横浜市鶴見区）を行列中

のところ、騎馬のイギリス人が先頭を横切り下馬しなかつたため、供回りの藩士が四人を無礼討ちに殺傷した事件だ。

攘夷を歓迎する人々は「さすが薩摩さま」と褒めたたえ、朝廷の中にも同様の空気が広がった。不本意ながら島津は攘夷派の先鋒にされていった。イギリスは幕府に対し「犯人の処刑と罰金一〇万ポンド」を要求したが、薩摩藩が拒否したため薩英戦争へと進んだ。

■薩英戦争により西欧科学導入へ

一八六三（文久三）年七月、イギリスは横浜に停泊中の軍艦七隻を鹿兒島に出動させて砲撃を開始した。折から暴風が吹き荒れて十分な攻撃効果が上がらず、沿岸からの砲撃で大きな損害を受けて苦戦した。応戦する薩摩側も砲台を破壊されて多くの藩士が命を失い、城下の一割が焼失するという大きな被害を受けた。圧倒的なイギリスの攻撃力を経験して、現有武力では西欧諸国を追い払うことは不可能と悟り、先進的な技術知識の導入を決める。

戦後、急速にイギリスに接近して武器・軍艦を購入し、軍備や工場の近代化の支援を受けることとなる。結局、武力による攘夷を断念して、積極的に西欧諸国の科

学・技術を導入し、国力を増強することが日本の将来のために必要と決意する。

■二つの寺田屋事件

寺田屋は京都の伏見（京都市伏見区南浜町）にあり、京と大阪を結ぶ船便の要所で薩摩藩が定宿として利用した。女将のお登勢の切り盛りで賑わっていた。この寺田屋で一八六〇年代に起きた二つの事件が起きた。これらが明治維新のキーポイントとなった。

■一八六二・文久二年四月の寺田屋騒動

薩摩の島津久光が一〇〇〇名の兵士を率いて上洛した。幕府に改革を迫るため、勅使を先頭に江戸に向かわせたのだ。一方、急進派



寺田屋

の藩士らが寺田屋に集まって、関白の九条尚忠や京都所司代の襲撃など、過激な計画を立てていた。久光はこれを中止させようと鎮撫使を差し向けたが、説得に応じず乱闘となり、一〇名の薩摩藩士が死亡した。この処置で島津は朝廷の信望が高まり江戸に向かった。江戸では幕府に強硬に改革を迫り、人事や職制を変える「文久の改革」が起きた。

■一八六六・慶応二年一月の寺田屋事件
薩長同盟が坂本龍馬の仲介で成立した翌々日、薩摩藩士を装おって宿泊していた龍馬と長州藩士三吉慎蔵らは、百数十人の伏見奉行所配下の取り方に襲われた。入浴中の婚約者お龍が異変に気づき、素つ裸に近い姿のまま龍馬に急を知らせた。龍馬はピストルで応戦したが親指に深傷を負う。屋根づたいに逃れて材木小屋に隠れる。切腹を覚悟する三吉を励まし薩摩藩邸に急報させ、救われて危機を脱した。

その後、龍馬とお龍は鹿兒島に旅し、霧島の温泉で刀傷を癒すなど、水入らずの一時を過ごす。だが翌年一月、京都での暗殺の時は迫っていた。